羇旅漫録

上之巻

ル 4
3377
1

3377
1

曲亭馬琴遺稿　坦菴幹校

壬戌

羇旅漫録

全三冊

川邊花陵
渡邉小華　圖畫

畏三堂梓

ル呂 3
421
1

これ竹の世兼好どに袖ぞぬれてきちも。さへの神にや
語れるん。かよの世に伊勢の宮居ゆきまへとさゑぐらの杖と笠
ぬれし立さハまつ。まちの路や二の世のあたへるなじとして。と名つ
何かより旅やどかしく。すぐ夜なかく秋の世山よりちの風まで。
ふるへばとうらん。なつの色の峠まさへ志れぞはじ。ころ何もよ田
ゆく絵や。もさま麦の枯穂何か知ながせて。さ身をまくし。山どかの
尾上のくだりもまた旅ねをなぐさめ。星すみ月もちどりみえよつ
こやこよ去ぞし杖をとゞめて。ゆる何つさを旅も何まうち流し。
ひぢ山の夕ぐれ。あの毛さん春まつぶれもふくらうきど。

曲亭翁真蹟

畏三堂梓

なつは人にすゞしさをあたへていそぐ。仰ぐ御子のめぐみあれ
こゞせ浄らかのまゝあはれあやをあらはし。ご法のなくのあらはの
なくなられ、さんさし秋風にちとりのまゝ。月としてるぞ
ゆふまくれ。堀江の月は波をこゑのつゆ。べてあら月には
や。いせぢより船をつると。うけの松のこゝやしろをおもひ。山田
松ざこの月は初月にめぐりし。津の町のながきよをたどり
をおもひしたる。ひゆくん面をそてて鶴のおとづれを
きゝあつて。雲の宿のまくらも。ひへぞおもふ友
人にとぶあれ。二月のなつ風のまき。宮のもてさそれ

畏三堂梓

なほだ。さ寒くまかく　けふもせんよにまつぎていれぐ
雅子。思ふ月　ちかはまつ　世の（あさの日）御教そしたゞかつきぬ。
くびよにのそぶを百日にはまつめにえらくにきるをおめやくに
うけまゝられて。津ひをかみしく。なたとなれかつ。されどもさへ
極く世をかゝれぞ。世のまあでくしら世あめしとも。
人をとえるまくくえざるべく。ちはつめるかられ津かる。
よみはそび行くれとおくられるを世ほまけバのこし
とくめくりどのかまごもみんちくべきをしつもおかしやうで紙屑（カミクズ）
筑そふかみそし判入れく。ほどこりかる祖にはくへんやく

曲亭翁真蹟

畏三堂梓

しけるを。ある人志ひてとゞめけるをも。きかずしてふるて
られたるにけしとぞなりぬ。かゝる世にながらへ
このたびこそよむしのおろかやはかなきことも、なほしも
このし。

蓑笠漁隠書

かくなむよみけるをおもひつゝ
はなとしてのきはのたのみなる
あはれしみしそのよの歌を
志のぶる思ひ引かされんと書つけ
又おもひやる人読のこれなりけり

長三堂梓

賢なるハまことをしれるしるし
愚しと先にみつての識ともせず　亦復
其のおちめなり此はやすらをぬるび
世をおほふつるやなきなすぬらん
紙一ひらをゆるす余か紙ぞらの

可否を論するものは余をしる
かなしきあそびなれと
壬申春日　曲亭主人書

畏三堂梓

旅泊繫略

享和二年壬戌夏五月九日卯刻、江戸出立、今夜神奈川泊、この処まで京傳子送らる、明朝袂を分つ、○十日大磯泊○十一日箱根塔の澤今日雨ふる、元湯弥五兵衞を訪ふに、此節川越の城主入湯まします、をりて、塔の澤の湯屋寸地も人を容るゝの席なし、故に酒樓中村屋東五郎が家に逗留す、今夕僕又助江戸より来れり、十二日猶雨ふるを以て逗留す、○十三日今朝雨少しくふる、晝より晴たり、箱根を越ゆ、沼津泊○十四日江尻泊○十五日府中駿河人にとゞめられて、二十日まで逗留す、○廿日嶋田泊この節霖雨にて大井川猶あふれ、因幡屋何某叮嚀にもてなさる、○廿二日金谷泊今夕川を越さり、故に僅かにて泊る、○廿三日掛川泊廿五日早朝秋葉へ出立、廿六日の夜又かけ川へ帰る、廿八日まで逗留、○廿八日袋井泊今日午時掛川を立て、袋井の完酔を訪ふに留守なり、すぐに過るべかりしを、妻女ねんごろにとめらるゝを以て、やむことを得ずして一宿す、掛川の雪松氏この所まで送り来り、今夕袂を分てり、掛川に遊ぶの時廿五日の朝僕に又助を、その故郷舞坂の在へやりぬ、故に一両日獨行き、○晦日吉田今日僕かへり来れり、これと濱松

みてあふ、○六月七日岡崎泊今朝吉田を出立、御油の外成といふ人にとゞめられ志ばらく休息、この夕岡崎へ至る、○十一日新堀泊あひ堀ハをかの崎より一里半ばかり西の方の在なり○十二日名古屋泊今朝新堀を立て名古屋に至り、同廿六日までで逗留、この間十四日津嶋の友を訪ふて津島祭を見る、おなじく十六日午時又名古屋へ帰る、昨日僕又助を江戸へ帰す、是より獨行、供なれバ逗留中万事わづらいしきゆゑなり、○廿六日宮泊今晩名古屋を出立、名古屋の友人大勢送り来る、又宮の雅人一両輩来會し終夜飲醼を、明朝乗船こゝにて袂をわかつ、○廿七日石薬師泊今日大雨ふるに○廿八日水口泊出水につき、七月朔日まで空しく逗留、○七月二日石部泊草津大水、道あれて通行なし、故に石部に泊る、○三日京都今日間道を経て大津に出づ、との間甚難渋、おなどくに廿四日まで京にあり、○廿四日夜大坂船今日京を立て伏見より乗船、戌の刻道頓堀へ着岸、○八月六日京都昨夜大坂を出立、友人舟場まで送る、夜中大雨、六日の朝伏見に着岸、今日も風雨甚し、先の大水にこりて大津へ出ず、又京へ行て晴をまつ、○八日水口泊今朝京を出立○九日津泊○十日松坂泊○十一日参宮今夕松坂までかへりてこゝに泊る○十二日

津泊○十三日桑名泊十四日雨ふりて舟出ず、桑名人にとゞめられて一両日逗留す○十六日名古屋今朝乗船、佐屋へまハる、桑名の架橋佐屋まで送らる、佐屋の本陣丁寧にもてなさる、故に志ばらく逗留、今夜名古屋に至る、○十七日赤坂泊今朝名古屋を出立、帰心甚あまさゝし、故に是より一日に十二三里の道を走る、○十八日濱松泊○十九日嶋田泊○廿日興津泊○廿一日三嶋泊○廿二日大磯泊○廿三日川崎泊○廿四日江戸今朝巳ノ刻品川へ来る、道に僕にあへり、家内無事と聞て道をいそがず、未ノ刻家に帰る、

凡道中百有五日五月九日より八月廿四日に至る

逗留の日數

塔の澤二日　府中六日　嶋田二日　掛川五日半　吉田七日　新堀一日　名古屋前後十七日　水口三日　石部一日　京都前後廿四日　大坂十日　伊勢妙見町一日

都合逗留七十五日半

崖言

一 遊歴中におのが目に珍らしとおぼえるものゝ悉くこれをしるす。古人の略傳○墓誌○珍書○風俗の異體○方言○妓院○雜劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等なり。序を得ず一覧せんといへども。その處を探得ざる。古墳等はしるさざるもあり

一 岐阜長良川の鵜船。愛宕。高尾。四明山の石川翁舊跡。石山寺。二見。朝熊。三保等は。必見るべき所といへども。或は道遠く。或は山高くして。炎暑にたへず。或は案内の友人當日故障ありて。そぞせらるもありて遊覧せざれ。故にしるさんとなさざれば。遺恨甚し。就中ながら川の鵜。十八樓。四明山を見残せるを尤うらむべし。

一 南都は歸路必遊覧すべきを。出水に日數おくれて。歸心あわたゞしく。且路あれて獨行の覚束なきに。ゆこのでやみぬ。播州高砂。紀州高野。攝州須磨赤石等僅の道を隔なれども。かれ是洪水に路次の序を失ふ故なり。西は住吉を限れり。

一 遊歴中人の需に應じて作れる狂文等數稿ありといへども。こゝに載せずして別本とれ。見るにわづらはしき故なり。旅中漫戲の詩歌は。その所を得てよく出せるそのこれを載す。是もつぱら後勘に備ん為にして。いとをさなきことのこはなうり

一 此書人に見せん為にもせず。又もつぱら長夜の友ともなさねど。老後茶話の記憶にしるしつくへ。駄賃帳のしるしとなせり。机上の鷄肋かゝること猶おほかるべし。

目録

○一條より三十九條までの話ハ。東海道大磯より大津まで
のことを記す。名古屋新堀又その中にあり
○四十條より八十七條に至て。京師の話をしるす。類をもて
ならべ評するにおいてハ。大坂の話もこれと混ず。近江も亦
その中にあり
○八十八條より百廿五條に至て。大坂の話をしるす。京の話
と雙評するところ前のごとし
○百廿六條より百五十七條にいたりて。伊勢及び帰路の話
をしるす

巻の上

一 大磯の懐古
二 蘋姑峯の雨
三 雨中の不二
四 農男 附龍華寺
五 正雪が墳 附十三佛
六 梅屋勘兵衛が舊趾
七 義元の像
八 駿府二町街
九 宇都の山
十 嶋田の川留
十一 小夜の中山
十二 紅毛人の墓
十三 来舶人の歌曲
十四 掛川の好事家
十五 秋葉の山
十六 戸守の鐘馗
十七 遠州訛
十八 吉田の花火
十九 吉田のめし盛 附街妻
二十 岡崎の出女
廿一 吉田岡崎の妓楼
廿二 をか崎の夏せ之居

廿三 五絛の山水
廿四 名古屋訛
廿五 名古屋の風俗
廿六 名古屋の評判
廿七 甚目寺の鐘
廿八 繪巻物 附 水滸後傳の目録
廿九 名古屋の芝居
三十 名古屋の天王祭
三十一 津島の挑灯祭
三十二 藪ノ香の物
三十三 江州の大水 附 攝河大水の噂
三十四 粟津の義仲寺
三十五 瀬田蜆
三十六 鏡山
三十七 三上山 附 百足山
三十八 三井の古鐘
三十九 奴茶屋
四十 遊女八千代が噂

巻の中

四十一 光廣卿の寛活
四十二 板倉侯の大量
四十三 六條郭の全盛
四十四 傾城局の券書

四十五 烟花城書画展観目録
四十六 遊女吉野が傳 附 [illegible]の盃
四十七 島原の噂
四十八 京師の妓院
四十九 祇園さし[illegible]
五十 嫖客の噂
五十一 きがへの譯
五十二 藝子の枕金
五十三 舞子の評
五十四 三絃筥
五十五 妓の衣服
五十六 妓楼の夜具
五十七 京の女児風俗
五十八 祇園大楼の噂
五十九 祇園の方言
六十 祇園の哥曲
六十一 御所うら
六十二 つくしうらさ
六十三 総嫁
六十四 四條の芝居
六十五 京師の評 附 風俗の図説
六十六 太秦の牛祭
六十七 旅の盆 附 大文字の火
六十八 六道の槙うり

六十九 きらいと
七十 京の盆祭
七十一 内裡の御燈籠
七十二 きうりさり太
七十三 せんぞて萬歳
七十四 京の七夕祭
七十五 地蔵まつり
七十六 京地の酒楼
七十七 河原のすゞみ
七十八 京都の節倹
七十九 洛外の古迹 附近江八景
八十 かしやの札
八十一 京市中の喪 附名古屋伏見
八十二 女児の立小便
八十三 女子のぼうし 附伊勢尾張
八十四 粟田の陶器
八十五 京師の人物
八十六 嘘談の名人
八十七 應挙が臥猪
同 淀の洪水 撞木町の噂
同 京の浮世画 附澤庵の画賛
八十八 八文字屋自笑が噂 附其碩
八十九 奴の小万が傳
九十 近松門左衛門が墓 附墨跡

九十一 西鶴が墓誌
九十二 椀久奉納の手水鉢
九十三 美濃屋三勝が墓 附評
九十四 遊女夕霧が墓 附評
九十五 紙屋治兵衛が噂
九十六 淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂
九十七 乞丐女六が墓 附評
九十八 二代目義太夫が墓 附元祖義太夫略傳

巻の下

九十九 契沖阿闍梨墓誌
百 家隆卿の碑 附貞柳碑の噂
百一 元和戦死の古墳
百二 紹鷗が墓 附千家の墓の噂
百三 鬼貫が傳 附評
百四 大坂市中の総評
百五 難波雀の抄書 附西鶴名残の友
百六 住吉 附難波屋の松小町茶屋
百七 松明の施行
百八 浪華妓院の噂
百九上 太夫天神のかし借り
百九下 伯人の評
百十 俳優作術
百十一 難波新地

百十二 難波堀江 附堀江さし紙
百十三 大阪妓院の方言
百十四 女子の評
百十五 堀江の藝子
百十六 妓楼混雑劇
百十七上 浪速のゑりやを
百十七下 幇間 京もあるく評も
百十八 首のぶが傳
百十九 五雀が噂 附幇間亦助が噂
百廿 総嫁
百廿一 とだやらふ
百廿二 妾奉公人引札の噂
百廿三 京大坂商家の評
百廿四 道頓堀の芝居
百廿五 伏見の夜泊
百廿六 伊勢詣の居風炉
百廿七 山田の家舎 附間の山
百廿八 古市の総評
百廿九 古市芝居の噂 附一身田及堤 安古の噂
百三十 大平が噂
百三十一 坂和田喜六が墨跡
百三十二 道のべ乃槿
百三十三 其角が自画賛の評
百三十四 伊勢の好み家 附人物の評

百三十五 筆捨山
百三十六 桑名の秋雨
百三十七 桑名の奇曲
百三十八 桑名市中の喪
百三十九 一目連
百四十 佐屋廻
百四十一 名古屋の十五夜
百四十二 藤川の夜行
百四十三 えせ坊の発句塚
百四十四 うらころを
百四十五 かゝう里
百四十六 濱松の夜雨
百四十七 東海道の噂
百四十八 薩陀山
百四十九 大井川
百五十 喜瀬川の大名
百五十一 箱根東福寺の釜
百五十二 さいの河原の懐舊
百五十三 平越の富士
百五十四 名馬の足跡
百五十五 大磯の戯咲歌
百五十六 遊行忌の群集
百五十七 帰庵の祝章
附録 旅中自戒十五箇條

総目録畢

京傳名ハ醒字ハ酉星岩瀬氏通称を傳藏と云ふ京橋のほとりに住せるをもて自ら京傳と号す翁と莫逆の友なりしが神奈川まで送りしなりし京傳ハ文化丙子九月五十六歳にてみまかりぬ

壬戌羈旅漫録巻の上

蓑笠漁隠遺稿　　坦庵居士正幹校

(一) 大磯の懐古

五月十日大磯の驛に泊る。きのふ用事ありて僕をバ品川よりかへし。今朝京傳子ハ神奈川にて別る。こゝろいまだ旅になれざれバゆふべ甚だ寂寥。鴫立澤もむかしの地にあらず。虎が石。ハよく人のしるところなれバしるさず

祐成全盛大磯傳。千里高名虎御前。可嘆衣裳群乳鳥。只今有出女如鳶。

(二) 蘋姑峰の雨

十二日のあした蘋姑峯をこゆ。今朝雨ふれり

箱根八里上流汗。騎馬越來行路安。却懼昨今皐月雨。明朝

此條先枝蓑笠雨談に出さるれば省くべけれど翁当日の吟あるによりて図さへ追加して并せてここに録するのみ以下雨談にのせたるのハ悉くこれを省きぬ

大井水漫漫。

(三) 雨中の不二

十日の夜より雨ふりて。三嶋。沼津。原。よし原。岩淵。薩陀山の間。一日も冨士をみず。府中逗留の間も。いずれ士峯を賞するによしなし。

さみだれは白ふじならぬ山は不二なしるらん

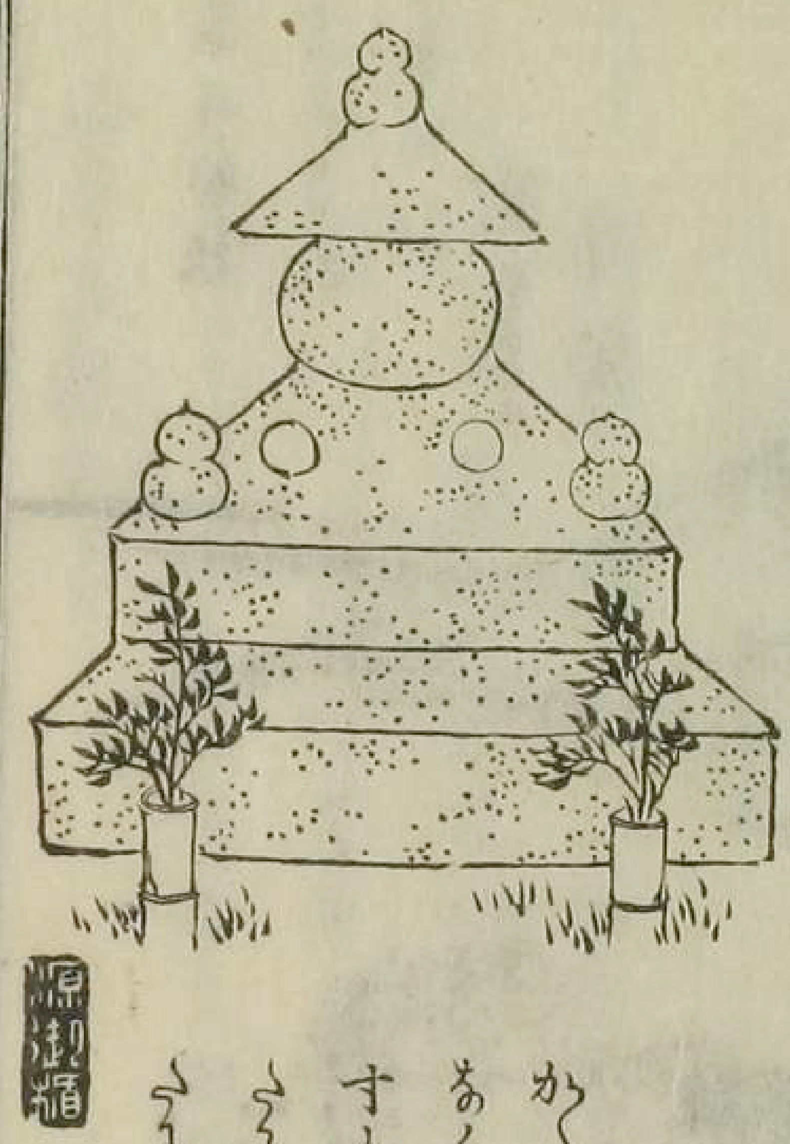
(四) 農男 附龍華寺

駿府の人の説に。冨士には四五月のころ。たん〴〵雪のきえのこりたるが。寶永山の方。凹ところに。人の形のごとく雪ののこることあり。これを農男と称す。この残雪みゆるとしもあり。みえざるとしもあり。田子の土人いふ。農男みゆる年ハ必ず五穀熟すと

凡士峰の眺望天下第一と稱せらるゝ所。駿州有渡郡大野村（府中ヨリ三里）龍華寺の本堂よりは。冨士を正面より見る最絶景なり。清見寺にまうでしところ。連日雨ふりければ。ゆのべしてやみぬ。

（五）正雪が墳 附十三佛

駿府寺町菩提寺墓門右のかたに。由井正雪が墓あり。



かくちのみのみし五輪も今は
あくなりけりとこゝろ高さ三尺五六
寸もあるべし墓法年月は滅ぞ
ふうをうけてあるさびるるや花はなう
こま遠ていりありちうより手向るや

又彌勒寺に十三佛あり。（府中より西廿町許）今は地名となりぬ。彌勒の十三佛と喚ぶ。こゝにも正雪が菩提の為に。宮城野志のぶが建しといふ。土人の説なり。こゝにも正雪が墓あり。尋常の石碑のごとし。（正雪の信史は未だその人あり、その女もちゝらのうちうたがひなし）

（六）梅屋勘兵衛が舊跡 此家両替にあきんどが有し

（七）義元の畫像

駿州阿部郡。大岩村臨濟寺（賤機山の向風の森の近地）に今川義元の画像あり。（東帯持笏）五月十九日（義元忌日）諸人に拝ましむ。此日雨ふりければ予参らず。

（八）駿府二丁街

駿河府中の妓院は二丁町とよびなす。本名は阿倍川町なり。神祖御在城の日。免許の遊女町なり。今も大におとろへたり。

見世を。よこつきりたる。故に格子の方よりハ障子を建てあり。嫖客暖簾をあげてほしいまゝに内に入り。籬のうちより見たてるなり。中なる妓ハおもてがわの方と正面に居る これをヨコミセといふ 楼上もせわしくゆきゝもむさくろし。ざしき持。部屋もちと称するその。江戸よし原にし河岸におとれり。客一人あれバその友ほどより出てそのざしきに入りて。ほしいまゝに何ぞぶに妓をまねけば。九ツをかぎりにその人じきかへるなり。おもてをつけにゆくといふ妓の詞何志なんし。おれぐなんし。あどゝいふ言葉をつかへど多くハ駿河なまりをまじへたれバ絶倒すること多し。妓の詞に文といふをそばのことゝいふなり。らんや手がミ一本かゝてなどいふ。かゝアまゝん。かくべしといふなり。妓「何さんちつくりおゐでなんしよ。客「今にいくぞへ。いくぞやゆく居しなり。

硯蓋などむさくろし。鼈子もこれまど。是亦似て非なるものなり。牽頭ハ郭中の米屋酒屋のミせのもの。又ハ郭の門番などの孩児なり。故に酒長（酒屋の手代）門忠（門番のむすこ）などの名あり。此の者夜ハ奉公のいとまにかゝるをもて。幇間をして酒のミに遣銭をもとむるもの計をなせり。（幇間ハ羽織ともいふ）言語形態胡蘆なるものに堪ゆり。甚いやしむべきものなり（二丁町の細見記ハ安永九年の春より つるやのや酒屋といふもののはじめてえらみて先行もそのゝち絶よ行れぞ其後一版あり予一本を得てなづさへかへまり）

（九）宇都の山

宇都の山の十団子ハ。豆粒ほどの餌を。麻糸にて十づゝはさぬき。五連を一トかけとなん。土人の説に。峠に地蔵井此たらせ給ふ。此のころほとけの夢想によりて。十団子を製し小児に服さしむれば。万病癒とかや（団子の数珠に擬する）

みやその製も
まさるらし

旅駕にのれバつゝをうつの山うつゝかゆめかあらぬなりけり

十 嶋田の川留

連日の雨に大井川往来をとゞまるが。岡部より嶋田の間に。諸侯きちくして。いとおぎはべり。予ハ二十日の夕嶋田に入る。予がとまる因幡屋てふ家も森侯の本陣となりぬ。この家旅店にあらねど。筆ごとのあまたがかくの如し。よりて因幡屋の向ひ何がし源六とかいへる商人の家に逗留す。時々の飲食ハ因幡屋より持来りて饗應しぬ。夜中驛中の繁昌小人の小うるさなど。さながら江戸に在るがの如し。川ハ十五日より廿二日にいたりてはじめて明ぬ。

妹がゆふ嶋田の駅にとゞまりてかへりゆきてのとゞこのぬぞうき

十一 小夜の中山

遠州小夜の中山夜泣の石を。日坂より十七八町ばかりひがし。山の往還にあり。無間山を街道より一里半なり。掛川の驛もづきより右のかたにみゆ。こゝよりみえまではなはだたかし

新坂蕨糕。兒育飴。由來傳世夜啼碑。鯨音斷絶無間事。大士方便垂大慈。

子育観音小夜の峠久圓寺にあり。淡ヶ嶽阿波手の神社。無間山観音寺にあり

十二 紅毛人の墓　両談に出たれバ省く

十三 來舶人の歌曲　上に同じ

十四 掛川の好事家

掛川下復町の大場氏（通称大助松風亭と号す）を。遠州第一の好事家なり。
近来名家の書画をたくはへること数百張。又よく客に待
も。所蔵の書画中に。堂上方の寄合書。國學和歌者流の寄
合書。儒者詩人書家畫工のより合書等あり。いづれも名
家のみをあつめたり。古人の墨跡を猶のこしもとめまし。僅の
扇面へ大家数十人のより合書なども。尤も志をたつとぶこと
厚し。このくさぐさもて得がたし。その弟を蘭陵といふ。（通称忠蔵書をよくす）
ことに人を京江戸大阪伊勢へつかはし書画をもとめしむ。（一國逗留半年に及へりとぞ）
おほよそ三年にしていまだ盡さずといふ。田舎
まれめづらしき人物なり

十五 秋葉の山

秋葉山ハ掛川より麓まで九里あり。五十町壹里なり。山中
又五十町あり。参詣の道。守驛より両路あり一ハ山越なし
て甚だ難處なり。一ハ平地なりといへども川多し。四十八瀬
といふ。予ひとり川しあどつるに二十七瀬あり。霖雨の後ハ
五十瀬にもなるといふ。夏日ハ橋なし。故にその川をこし
く歩ミるりにも。又道中食物乏し。つねゐの旅店のみな
大に衰へ。麓に數軒の旅店あり。甚奇麗なり。山中にもかゝ
る旅店あるやとめをおどろかすばかりなり。秋葉山中一町
一町に志るしの塚あり。杉の木立宮のつゞり。江戸の王子の
社邊に似たる所あり。駿州より尾州まで。驛の十字街。或
ハ街道ことに悉秋葉の常夜燈あり。この社近年わづかに繁
昌なり

いろはにほへとはつあかうや假名の數四十八瀬を越す川京

夏なからまつりは秋の祭も過てかくに山家も酔のしくま神まつり

(十六) 戸守の鍾馗

遠州より三州のあひだ。人家の戸守をことごとく鍾馗なり。これらに山伏某と名をしるしたるもあり 鍾馗のこと愚按ありここに贅せず

(十七) 遠州訛

遠州より西を半元服の娘多し。白歯のむすめはたえてなし。まゆげをそりてかねをつけたるをいふなり。されど字をなまりていふことは駿州より尾州のあひだにあり。就中遠州人ぞ多し

(十八) 吉田の花火

三州吉田の天王まつりは六月十五日。今夜の花火天下第一

と称する大筒と称するもの 立物といふ 二本。筒の周圍数十尺なり。く櫓を組てあまたと居る。その外種々の花火あり 大筒の資料ハ例年城主より出さる おのおの桟敷をかまへてあまたとゐる。又近國よりも見物に来るものあり。鍛冶町のうら通りにある杉の木をとる。囃子神楽あり。花火を市中まで〳〵あぐるなり。この夜屋上或は簀子の下に。火こぼれかゝりたりしも。火難のうれひなし。是氏神の加護によるといひ伝へたり

牛頭天王の社。神明。八幡。ともに吉田城内にあり。六月十五日天王まつり。前夜十四日花火なり。本町。上傳馬町の両町より揚る。高さ十三間。巾三間ほどを立物といふにて造り大花火あり。火のうつらぬやうに大釜を覆ひて待つ。あまた

に火をうつす時なり。それより火屋上にむらがりおりたる。見物の人々
はぬきま莚をこのむ。その外町々の花火数百あり
十五日より田五ヶの寺院より飾山を出す。至てさうびにして古
雅なり。十四五の童頼朝に扮し。金の立烏帽子直垂太刀を佩
く馬上なり。頼朝の乳母とかいふものあり。綿帽子緋のきぬき
て馬上にまたがる。ほか十六人の殿原とて。楳の素袍か
け烏帽子をまぶかにしたがふ。城内まで走馬あり。中に重忠
と名告るものあり。此左右にあまた笠浴衣を被るもの二人
まんぢうを数百ふところに入れ。これを笹にゆひつけてこれ
にあたふ。かの重忠は騎射笠錦の陣羽織脊に幣をさ
し領主の桟鋪の前にいたり。馬上ながら禮をなしてふところ
のまんぢうを投る。見物はあらそうて吉事とす。また笹など

まといふあり。大太鼓一人。小太鼓二人同衣裳にねりゆき
とりまぜ紀。覆面し。にしきの陣羽織小手脚當なり。ちや
しんあまぐさゆかたを着しさらに挑ちんをつけて同音に
うたふ
「天まんは何佛まそゆしまは日本一の神あらねすし本
塩がま坂名所ましのまんまをさんまんな」こまをとりうたふし
たゝかり

十九 吉田の飯盛 附衒妻

よし田のめし盛。夏は越後ちぢみにねかし縞の前垂をうけ
手に團扇をもちてく夜行す。よし田岡崎とも。妓たちとしぐ
く伊勢より來るものなり。またに妓たちのり伊勢訛り
なり。妓席上にて三絃を鳴さず。かのむろぶしなどうたふ

ことあり絶倒せるに堪たり。今切のこゝろしを經て西は。人物その外江戸にあらず。京にもあらず。中國の風姿らしに於てつるべし。土地の婦人はかゝるいやしきも美なれば。商家の衒妻などをみれば。黒暗天女の如し

「よし田をか崎の妓の髪かくのごとし是伊勢風なり土地の女をおもとゝたゞつり伊勢ハ人の妻娘も大かたこれなりけるかし

「伊勢の嶋田髷ハくさち江戸にちかし京ハこれに異なりかみハいづれも水がくえぬせハまけて平油を多くつけるゝ京ハまけへもつけず

「かつ山をまへでゐろくくりとたけりけれ稲なり是京とさかりのなりまへてく伊勢ハこれをあらくなまなびんも九し故に江おまへん九に申やと

㊁ 岡崎の出女

をか崎の妓ハ。歯を染ることなかりしが。近年ゆるされて歯を染るなり。芝居などへも見物にゆくことなかりしが。いまにても今ハゆるさきたり。妓の風俗よし田に異なることなし。妓夜行せらる時ハ。夏ハあかき浴衣冬ハ布子などをきせりくあるなり。そして絹布を着べきものなれはゆるさずかくはしらし。但諸侯の旅館に参る時のことまでく美服にて夜行せ

㊁ よし田をか崎の妓樓 附矢矧ばし

よし田をか崎四日市などハめしもりとかりにやり。ことしくよびよせくまさゞるなり。客あるときのも必ず来る。妓ハ一軒に一人をゆるさる一軒二人ある家あり三人抱ることもゆるさず妓なきは旅店も妓ある家よりも月々資料をおくることにゆるす大樓も妓二人をおくありよし田

妓百余人あり一踍のおんやハ都合がよろしといへどもつとめがよろしい
といふ。よし田岡ぎおんより西。伊勢の妓樓ミなおなじ。京都
祇園ふうハ誰さんハなりやせぬといふ大坂新町ふうな。誰
さんをあけでおぎりやすといふ。そのぎおんちよろし屋の八
重といふめしもり。少しハ顔色美なり。ひようずん價より
たかし

矢矧橋長さ二百八間やはぎ川やはぎの里のひがしにあり
水源木曽の山溪より落て末を鷲塚川といふ。西尾にいた
りて二流海り入る。矢はぎ男川とよ川の三大河あるをもつて
國を三河と名づく

(廿二)をか崎の夏芝居

をか崎六地藏といふところにて。土用芝居をみたり。よし簣

張なしに二階棧鋪なし。中山来助その外中芝居の俳優な
り。九人の外客なる妓も客と同席にて見物するとあれ
ども。狂言ハすぐね合戦と五人切まであり。萬事不都合
絶倒すること多し。

(廿三)五條の山水

三州新堀をかざきより西一里半在深見荘兵衛木綿問屋豪家なりといふ人あり子息
ハ左太郎といふ。狂名を朝倉三笑といへり。その家の納戸の
椽頬戸のおし穴に。紙を一尺ばかり手前におしあてをバ十間
むかふの先の泉水草木悉く紙中にうつる。その鮮明畫るが如
し。五色ハ五色にうつり天色ハ天色にうつる。むのうごきもさながら
まゝうつるなり。予が見しときハ。池に杜若あり。竹あり柳
あり。庭に小児の手習草紙ほしてありしが。表紙のかん字

南村輟耕録　巻之十五
平江虎丘閣殿上有一竅當日色清朗時以掌大白紙承其影則一寺之形勝悉於此見之但頂反居下耳此固有象可寓非幻出者松江城中有四塔夏監運家乃在四塔之東而小室内却有一塔影長五寸許倒懸于西壁之上不知從何來然不常有或時見之焉是又不可曉也

年月までありゆくにようめなり。雲の追しくにゆつまり。又ちりゆにに。竹屋などの風に戦ぎ池に漣のたつなど。言語同断の景色。理外の機関なり。主人ころもに庭に小児を出して見せしむるに。眼鼻衣服の模様までよくうつれり。ころづう

○是なぞの戸のふし穴より。外の紙一枚の内へ方十八間の山水。明細にうつること。蘭畫びいどろのごとくなり。そのに似たり。戸をとざし内をくらくして外より影をとるなり　ちかき京大宮どほり百姓丹羽又左衛門が納戸のふし穴に紙をさしかざせむ。東寺の塔あざやかにうつる。あまりもさかさまにうつるなり　また信州上の諏訪薬師堂のうらの羽目のふし穴よりも。塔影のうつるといふことはかねて聞しが。いまだ目前に見ず。京と三河の事ハ予遊歴の序なのあたりに見たり。わりふに日ざしの自然とさくのう

しむるそのなかるべし。日中ハうつることなきもあざやかなり。世間にかゝることはあるべきなれども。幸にその方にふし穴なく。ゆゑに人のつねにいはぬところなるべく。氣のつかぬなるべし。今按ずるに輟耕録に塔影のことあり。又酉陽雜俎にもあるに似たることあれ。さればこそ異國にもむかしよりありしことゝ見えたり。

（廿四）名古屋訛

名古屋人ハ。きることいふをせるといふ。「コウおつせる」「どうせる」「何いきつせるれ」などいふなり。する人とれいふをば。仁とらふ「この仁がきさつせる」「よれ仁でや」などなり。よれ人とれいふくいふそぬなり。又きんとしるトいふ。ぞろつものゝうち。又きんとしるといふこしらふもろよみなり。

なごやなまり

きんなよふのむんね。(丁寧ノ転語)いろぞと。(当行ナリ)文いおし。(ヨコセノ訛)わも(我ナリ)をたらし(謔ノ義ナレトモコヽニテハ人ヲ騙スヿヲ云)ちやうらし。ひそうい。(汝ナリソナタノ訛)どこのぶつさまと。(人ノ家婦ヲ云)人の家婦ニ間婬スルヿ他邦ニモアリトイヘドモコノ地最甚シコレ娼家ヲ禁スル故ナルベシ どこのじやむちやねり(出會ノ宿所ヲ云)ふうもよんべ(キヌギヌノカゴトナリ)ついづい。(敢テノ意)あざらしまぜね。(不来ナリ)ようけちおけよあいさした。(不図ナリヒヨツトニ同シ)いましいがひよいとまさ。(コヽロヘツヨナフナリ)ようござとなひもあらアぞと。(當ニ有ル)(ホンニト云ニ同ジ)おつゆりねさ。よつぴとらうてし。(終夜)やけをおこらく。(オコシテ)ねさりひなんし。(腹立ノ皃又放逸ノ皃)○又どうでどやけじやなどいふもちらぢちのうちなり

(廿五)名古屋の風俗

名古屋ぢ男女の風俗。とつぞり大坂をまなぶなり。ゑびきりちげ(男子の髪の風)おおとづと。(女子の髪の風)なじらねり(圖ハ末ニ出)人気の活達なるは江戸にならふなり。吝嗇は京をまなぶべり。故に江戸の

戯作狂文を名古屋まではよく通ずるなり。大坂を通せずとどこれをよろこぶ京の人より一向通ぜず

名古屋の女子顔色の美なるも。腰は大にふとし一人として細腰なるはなし。是も風土によるにや。男子夏は編笠を蒙りて歩行す。日傘をさしたるもあり。但藩中の女子のこと。萬事江戸の風俗に異なることなし

(廿六)名古屋の評判

名古屋は魚肉に富る所なり。魚町七ッ寺などに紀酒楼あり。蒲焼屋と称するもの一種にあらんば。種々の料理をするなり。蒲焼の風味。京江戸よりおとれり。硯蓋にも蒲焼をつむなり。凡劇場の外。三絃停止なり。見世物などにも太鼓のみなり。凡酒楼中客二階にあがらば。男子出て酌をとる女子は二階へ上らず。國禁の甚しきこと知るべし。名古屋に

ざ針妙と称するもの。三州あたりは街妻に同じ。これも今ハ稀なり。呉服屋ハ水口屋繁昌なり。煎餅ハ岡山姿見などいふ家よし。狂言踊衣裳ハ小しく屋。鼓太鼓ハ春田屋浮世繪ハ駒新唐繪ハ月峯。紅白粉ハ鏡屋造り花ハ吹田屋書肆ハ風月堂永樂屋。貸本ハ湖月堂。菓子ハ寶屋。鮎ハ岐阜より來るをよしとす。狂歌ハ田鶴丸。誹諧ハ士朗この外しるしがたし。春日遊山の地ハ。門跡のおあけ所。若宮八幡。七ッ寺熱田櫻の天神等なり。天神の別當を岳靈院といふ禪宗數品の古瓦をあつめて瓦礫舍といふ風流の莚會興行あり又夏日納涼の地ハ廣小路藥師前なり。柳の藥師の別當を正傳寺といふ瓦礫舍の實弟なり奇石をあつめて多く柳下亭と号すこの兄弟風流の人なり數十軒の出茶屋見せ物芝居等ありてもまたにぎはへり。柳の藥師より廣小路の景色。江戸兩國藥研堀に髣髴たり。納涼の地を琵琶島

追考 福富のさうしハ京にて橋本經亮の所藏となりをそうつさせしが京傳子懇望によりておくりおくれり

よしといへども道遠し故に水邊にゆくもよしといへども廣小路最繁昌せり

(廿七) 甚目寺の鐘 此条も雨談に載られバ省く

(廿八) 繪卷物 附水滸後傳目錄

名古屋にてみたりし繪卷物

一 ちとめ松もら　繪卷物一卷　名古屋 山崎良民所藏

勾當の内侍の作といふ雀の死したるを諸鳥のとむらふありさまの戲作なるべしいづれの時の内侍にや詳ならず

一 福有（仁富）のさうし　繪卷物写一卷　名古屋 鈴木甚五左エ門所藏

京にありし日おなじ雙紙のうつしをみたり橋本氏の所藏なり今兒童の夜語に花咲ぢゝといふものゝこの

雀松原作者勾當内侍なり後に伊勢松坂の一友人に津桂窓云。此の勾當内侍ハおそらく後土御門院の時四辻季春妹なるべし。新撰菟玖波集の作者の内才女あり。かゝる筆あるべし。その前後勾當内侍に才女ありしを聞かずと云り。

福有長者のはなしに似たり是より出たる話にや

一花鳥風月　繪巻物一巻　名古や柳下亭所藏

一天狗の内裏　繪巻物

これハ先年名古屋の道具屋にありけるよしみずから旅人かもとめ行きん次の日向ふよりもたりしといひしとぞ名古屋人もそしりあへり

一國姓爺後日　義太夫本近松作大字繪入

一美本繪入三國志演義　柳下亭所藏

られしハいづれもとりしれそのまゝ予も逗留中珍書といふものハあまたねど古本をもとめし構けるより

又名古屋廣小路釈座（すりざ）守随の藏書に水滸後傳十巻あり主人ひそかに人にみせず予柳下亭に就てその目録をうつしたり

○水滸後傳　古宋遺民雁宕山樵編輯　金陵憨客野雲主人評定

第一回　阮統制（小さより）梁山感舊　張幹辦湖泊尋災

第二回　毛孔目横吞海貨　顧大嫂直斬豪家

第三回　病尉遲間住遭殃　欒廷玉失機入夥

第四回　鬼臉兒寄書罹禍　趙玉娥衒色招奸

第五回　老管營寃遭横死　撲天鵰冤被拘囚

第六回　飲馬川李應重興　虎峪寨魔王鬬法

第七回　李良嗣條陳賜姓　鐵叫子避難更名

第八回　萬柳庄王貌招殃　寶帶橋節孀遇故

第九回　混江龍賞雪受祥符　巴山蛇截湖徵重稅

第十回　墨吏賠錢受辱　豪紳斂賄傾家

第十一回　駕長風群雄圖遠略　射鯨魚一箭顯家傳

第十二回　金鼇島開基殄暴　暹羅國被囚和親
第十三回　救水厄天涯逢故友　換良方相府藥佳人
第十四回　安大醫遭譏避跡　聞參謀高屋留客
第十五回　大征戰耶律奔潰　小割裂企弓獻詩
第十六回　潯陽樓感舊題詩　柳塘灣除兇報怨
第十七回　穆春喋血雙峯廟　扈成計敗三路兵
第十八回　黃統制遣枉陽山　焦面鬼謀妻落井
第十九回　納平州王黼招兵　逐強徒徐晟奪甲
第二十回　賣揚劉村汪豹累呼延　失保定朱仝投飲馬
第廿一回　李應火燒万慶寺　柴進仇陷滄洲牢
第廿二回　破滄州義友重逢　困汴京奸臣遠竄
第廿三回　喪三軍將材離火宅　演六甲兇戲陷神京
第廿四回　獻青子草野全忠　贖難人石交伏義
コノ回王進ハジメテ出ル
第廿五回　折王進小乙逞雄談　救關勝大名施巧計
第廿六回　逢天巧荒殿延英　發地雷寺基殲賊
コノ回蔡京・童貫コロサル
第廿七回　渡黃河叛臣顯戮　贈鴆酒奸黨凶終
第廿八回　横衝營良馬歸故主　鄆城店小盗識新營
第廿九回　還道村兵擒郭道士　柴髯伯義護美髯公
第三十回　聚堂雲兩寨朝宋　同泛群雄碎地
コノ回義友日本サツマヘイタル
第卅一回　國主遊春逢羽客　共濤謀叛遇番僧
第卅二回　慶生辰龍舟見競渡　纂寶位綺席進霞丹
第卅三回　頭陀役鬼燒海泊　李俊誓志守孤城
第卅四回　大復仇二兇授首　議嗣統衆傑歸心
コノ回日本ヨリ共濤ガ残黨ヲスクフナリ
第卅五回　日本國興兵構釁　青霓島煽亂殲師

第廿六回　振國位勝算平三島　建奇功異物貢遐方
第廿七回　金鼇閣仙客留詩　牡蠣灘忠臣救駕　コノ回公孫勝辭シテ山ヘカヘル
第廿八回　武行者僧房叙舊　宿大尉海國封王　宋ヨリ李俊ヲシヤム口国ニ封ズルナリ
第廿九回　丹霞宮三真修靜業　金鑾殿四美結良緣
第四十回　薦故歡燈同宴樂　賦詩演戲大團圓

以上四十回目録畢

巻中ノ人物○印ハ星外ノ英雄△ハ星中英士ノ子孫□印ハ李俊ト同盟ノ人前傳ニ小集義ト云ニアル人ナリ◎印ハ暹羅國ニ止ラヌ人ナリ無印ハ星中ノ豪傑ナリ

李俊シヤムロノ王トナル　柴進シヤムロノ丞相トナル　◎公孫勝辭シテ山ヘカヘル　李應　蕭讓　燕青　樂和　蔣敬　○王進

欒廷玉扈家庄軍法ノ師　朱武　樊瑞　關勝　孫立　呼延灼　朱仝　黄信　○扈成一丈青ノ兄ナリ　阮文七　裴宣　戴宗　鄒潤　穆春　杜興　楊林　聞煥章コノ女ヲ立テ俊ノ后トス　花逢春花榮ノ子ナリ。シヤムロ國王ノ女ニ戀シテ附馬トナル。初メ逢春シヤムロヲ伐シトキ。公主櫓ヨリ逢春ガ美少年ナルヲ見テ容ニコレヲ戀フ。李俊シヤムロ王ノ爲ニ。共濤等ヲ亡シテ後。國ヲ逢春ニユツラント云。逢春シタガハズ。衆オシテ俊ヲ王トシ。逢春ヲ附馬トス。コレ俊シヤムロ王ノ爲ニ。逆賊ヲ亡シタル功アルヲ以ナリ。○ハシメ共濤。企叛シテシヤムロ王ヲコロシ。位ヲ簒ノトキ。李俊一人シヤムロニアリ。依之俊兇兵トタヽカフ。共濤日本國ヘ救ヲ乞フ。日本關白。三万ノ兵ヲ發シテ來リ救

フ。コノ回ノ評ニ云。關白ハ官爵ナリ。関氏ノ人ニアラズ云々。關白ノ兵来ラザル以前。共濤等首ヲ授ク。コヽヲ以テ李俊勢サカンニシテ。日本ノ兵ヲ敗ル。關白ノ兵船。大風ニアフテ。ソノ終ヲシラズ。文中關白トノミシルシテ。ソノ姓氏ヲシルサズ。コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ關白ノ名ヲ聞コト久シ。依テ大將ヲ關白トス。胡蘆スルニ堪タリ○柴進ヲ丞相トスル條下ノ評ニ云。進ハ宰相ノオニアラズ。然レ氏コノ人名家ノ子孫ニシテ。又徳行アリ。故ニ衆人オシテ相トス云々。

△宋安平宋清ノ子　△呼延鈺灼カ子　△徐晟金鎗子徐寧ノ子

□宋清　凌振　安道全　金大堅　□童威　□童猛　□費保

□高青　□猊雲　□狄成　孫新　顧大嫂　皇甫端　蔡慶

追書
伊勢松坂の友人殿村佐五平近ころ京師にて水滸後傳を購得たりといふ享和中予尾張名古屋の客舎にて一閲せしかとも倉卒の際にして多く忘れたりよりて借覧せまほしちよしをいひつかはしけれどもけひて部附し
庚寅三月廿一日
右の書全四十

◎武松　武行者ハ。シヤムロニ至ラズ。寂期ニ群雄ノ忠義ヲ論シ。宿大尉ニ請フテ。李俊ヲシヤムロ國王ニ封ズ

以上四十七人

この書倉卒にしてあらましをよめり。故にその目録を抄出して後勘に備ふ。水滸後傳もと二本あり。共に今世にまれなり大坂の國瑞の話に。予崎陽にありし日。水滸後傳を得たり。そのころ小説にこゝろなかりしかば。價廿目ばかりにかへく人にゆづりぬ。今ありせバをしむに堪ざりしとかたりつ。大阪逗留中。書肆に水滸後傳のことをたづねしに。その名をだにしらぬ書肆多し。江戸にてもたづねしに。その書をみることなし水滸後傳二本あり。一本ハ四才子傳の評をせし天花翁の作なりといふ。予いまだこれを見ず

同十冊嶋屋よりうりらけ来る、佐五平ハ篠斎と号ぎ松坂の豪富にて本居宣長の門人和歌を嗜ミ又和漢の稗史を好む百十里外に在て書を貸を友ハ多く得がたし

馬琴按ずるに。寛永年間。山田仁左衛門といふもの。暹羅國に渡りて登用せられ。大國を領せしことあり。その事。智原五郎八が暹羅記事にしるし。其のちまた水滸後傳の作者。粗山田仁左衛門が事を傳へ聞て。李俊がことに撮合せしにや仁左衛門が暹羅國より奉納の繪馬。駿府の浅間の社にありしが。近属本社回禄の時。かの繪馬も焼たり。其寫し神職の家にありといふ。

再按ずるに。山田仁左衛門が事ハ。唐山にて水滸後傳の作ありしより少し後なり。かの書に撮合せしにハあらざるなり。余が考別記にあり。今亦贅せず

（廿九）名古屋の芝居

名古屋の芝居ハ。橘町と大洲にあり。近ごろ中絶して又近年免さる。竹田からくり名代あり俳優を九人の外を免さず。予がみたりし時ハ藤川八藏。中山一徳。松本よね三。中山文五郎。市川甚之助。（國藏 才子中芝居さてもの）等にて釜が淵の狂言なり。初切狂言に。米三が無間の鐘評判よし。米三ハ始終評判よし。八月に至りて兵太郎。歌右衛門。叶。眠獅。雛介（女形なり）弟などくだりぬ。（もとめ橘町にて興行八月ハ大洲の芝居なり）二階桟敷なし。又辨當ハ椀膳にて運ぶことを禁ず。故に食物を。七寸位の重箱に入れて運ぶなり豪家見物の前にハ。重箱をつみあげてみするにほこる。又茶菓子などうるものハ。悉く十四五歳の童なり。茶いらんか。菓子いらんかといふ（すべて名古屋在津島辺言語甚ど野鄙なり）木戸に繪看板なし。板に俳優の名を書つけたると。幟のごとくなり。名古屋の町人ひゐきの俳優へ。あらそふて水引をやる之

桃色の木綿に。墨にて進上某丈の文字をぶつ付書にしたる
出来合の水引もあり

(三十) 名古屋の天王祭

名古屋天王祭の車樂を。車二輌を組あはせて上に山を飾る。
鉾なし。車を大なる地車なり。大八なをならん。牛をつけず。大
なる綱二筋つけて。數十人あまをひく。車樂の欄干ハろぬり
なして。うな物又立派なり。四方に猩々緋。或ハ天鵞絨に金絲
のぬひをのしたるきぬをさげて甚ダ奇麗なり。上にハいろ
〳〵の人形をおく。その人形拍子にあはせてさまぐの機關
なり。笛。太鼓。つゞみ。志ゆんぎりなく拍そ。祇園ばやしなり。警
固ハ上下を着ぞ。袴羽織なり。船鉾ハ京のうつしなりといふ。
伯樂天上。陵王仝。布袋からこ人形のおどりあり 壽老人。上 同 布袋の車樂ハ。から

子の人形前に立。筆をとりて文字をかくからくりなく。甚ダ
手際なるものなり。凡車樂七ツばかりもいづべし。十五日の
夜試樂。十六日未明より城中へ引こむ。日暮てかへる。車樂に
挑灯數十張をつけていとうれしなり。四月十七日東照宮の祭礼ありその礼巖重なりと云
名古屋堀川の向ひハ鳶のその多く居る所なり。此所にて
毎との年そのども。六月天王祭のまへ十一二日頃よりまい夜
のろ〳〵の俄をする。或ハ大なるちんぎり結桶をおけ。そら豆
壹升廿八文と書たる札を出し。その側に莚を敷。數十人丸裸
になり。尻の方を上にむけ。うつぶけになり居て。そら豆のう
たちに似せて人をまらせるなり。宵より五ツ過までハ
にかゞやりねる。又ハ人家數十軒をうちぬけ。門毎に大なる桶
を横にふせ。底をぬけて目が孫の如くし。庇なきハ山川草木を

あやしく造りなし／＼その上に七八人さまゞゝりのでうちて（かやはり香板の人形のごとくみせる。これも五ツ六ツすでは。身うごかしもせず。さて桶の穴より内をみれば。向ひは隣堺の垣など引はらひ。厠物置も脇へ引て野原のごとくし曠々たる所に。数十人忠臣蔵夜討の体にいでたちてならび居る。のぞきからくり儀なり。警固のものは上下を着てのうらぞ庇にあらぐり。この外毎夜さまゞゝの俳優をなすぞ。昼を崩したる所をはらろひ夜をこまより志らずにかる。その体甚だものぞかし。又七月盆中名古屋の市中。小児ちひさなる一力度を作り。太鼓たゝきてものしはりく。おもてを梵天と名づく。大人もちゝまで種々の俳優をなすといふ。名古屋の天王祭宵宮に家々温飩を製する事恒例なり此地うどんもあそぶよし

（卌一）津島の挑灯船　此條雨談にくはしければ省く

（卌二）藪に香の物　右に同じ

（卌三）江州の大水　附摂河大水の噂

六月三日より雨ふりつゞきて暑気甚し。廿五日にいたりてやうやく雨少しくやみたり。逗在中あまごひ雫を予はこの時名古屋にあり紀。廿七日の朝桑名四日市辺。朝四ッ時頃まで雨ふりたるよしきけれど。宮をたちしふりぬ。宮と嶋見に一両年前よりめしもりをおくことをゆるさる。吉田から寄すれ似ぞのぞきに醜婦なり名古屋人これをおかめと渾名せり。妓楼もあれど旅人はその旅店へもよぶよし　廿七日に宮より乗船その夕石薬師泊り。明朝より大雨。廿八日水口に泊る。この夜ますます大風雨。廿九日の朝横田川水口より二里餘はすぐにわたしかれど。水ましてて渡しなくまちせひなく昼頃又水口へ引かへせり。餘の旅人も横田川の川端いづみといふ所の建場茶屋へ泊るやうになる

まど。予ハ人足の都合なしかきかバ泊らぞ。その夜大水。水口田町へハ床上四五尺水はく。驛のうら手の田畑一面に水おし来りかるうち五六人溺死ぞ。予ハ驛の中程鈴鹿屋といふ旅店にありしが所を高くしまく水難なし。いづくハ十二軒ばかりのまことにめし今日のいづくは建場茶屋へ泊りなだむなしく水中の鬼となるべきを。運はよくして一命をひろひぬ。いづくに泊りし旅人七八人ミつぞるよし土地の人ちうらに大竹藪ありしその竹にとりつきてたすかりしといふ あれによりて一両日水口に逗留ぞ。七月三日の昼頃水口をたちて石部に至る。此間所々は堤崩れて田畑をおし崩し。街道も古松倒れ。碌々として足を入るべき地なし。横田川ふかく

こゝろんでもただわきまへしとわりなかり大事の命すでにおろひつ
澤瀉の所中にて渡る横田川あれ遠く来ぬふるさとの空

洪水に家を流されたるもの道路に號哭し。或ハ太鼓をうちて人足をかりあつめ。堤を修覆し。水死の骸をさがしぬ。さるその感哀して魂をいためしめずといふことなし。横田川をこえて二十町ばかり来るに。牛を牽て田畔より来るものあり。その牛脊の上に泥つきたり。腹ハ細くその聲悲し。その人の云。是ハてばといふ所のものなるが。洪水いまだひかずして牛に飼ふべきものなし。故に石部の在にある人にあづけんために来りしといふ。予この牛を見て梁の恵王の仁をおもひのみ。程なく石部に到りきぬ。草津驛洪水にて家流れ人死たり。故に昨今往来なしといふ。よりて今日石部に泊る。明日径(つゞき)あるよしを聞き出し。案内をやといて石部をたつ。艸津までの間。堤崩れ家流れてすさまじく駭然たり。草津の驛の入

口よりは膳所より役人詰居て人を通さず。ようやく近在へ水見
廻に出く體にもてなし。驛の入口より左りへまはりて田の中
を行くこと十五町ばかり。水高ければひざをこし。長き竿を杖と
し一歩いたゞく一歩をひきく。互に聲をかけ。からふじてう
ぢの餅の前へ出たり。是よりは陸地なり。問屋より表通りの
家八九軒おし流しける由。此辺りも人家多くながれ。四五十人も
溺死せし死骸を積て累々たりとものがたりぬ。森山。彦根。又大
水家流され人死したりといふ。予が荷を持たる人足も庇にと
りつゝく。十町ばかり流されたりしが志ある人の家の二階へ
流れつけさぐに二階に這ひあがりて。一命をたすかりしと
いふ。阿波侯この時あちら川に居たまひしが守山の洪水によ
りて。胴勢食物乏しく難義したまひぬとぞ。只囂々として東

西より詰のこなり。大津も驛の入口をさらし水つかりたりと
それ石橋など少しく損じてあり。逢坂山を山中大に崩へさ
るよしなれども。街道は山少し崩て一両日馬を通さゞ

あふさかはせきとめられつ秋の水

三日の夜京都木屋町の旅宿へたどりつきてきけば京は水
難なしといへども三條五條の橋の外かり橋はことごとく流し。
河原茶店の腰かけ等みな流しられば涼みもなく寂寥たり。
きゝて又七日は大坂への通路もなく。只攝州河州洪水の風聞
まちまちなり。四日の朝角倉家中森氏の話に云。余きのふ伏見
へ水見聞にまかりしに伏見豊後橋中書嶋等ことごと二階よ
り船にのりて逃しとぞ。淀の城は塀の屋根少し見ゆ。大坂天
満橋天神橋その外橋五ヶ所落たりといへども。いまだ通路な

けれバ治定なりしといへり。今日清水にのぼりて。伏見の
くるまで眺望するに八わた山崎邊水一面にして只真白にみえ
中四五日程はようやく大坂の通路あり。志め野堤きれて河内
へ水おし入。水損の農民を道頓堀の芝居へいれおかれ。大坂
中の豪家或ハ一町くにて組合て施行を出す。或ハ米五十俵銭
百五十貫文。或ハ單物五百。繻袢千枚身上の分限によりて差
あり。凡攝河の水損百二十餘ヶ村なりといふ。十人にて語
れバ十人大同小異なり。只少しよりすぎるをのみ大坂の
施行のこと。宇治辺大洪水宇治をして落て橋姫の社流れ、與聖寺平等院大に荒れたり。八わた山崎辺も水十八九日ひかず
七月十日頃大阪より京へ東の洪水を告來るその文に云
六月廿七日八日大風雨忍領熊谷土手二百間許一ヶ所切
込又一ヶ所八十間餘切込夫より東の方幸手栗橋近在方

關宿權現堂切込奥州海道中山道今五日迄往来留所々家
流れ水死人あり江戸本所北川筋三圍秋葉辺出水往来凡
五尺程相州戸塚辺近在方大水六郷川廿八日より二日朝
まで留る馬入川廿八日より四日まで箱根三枚橋落大井
川廿八日より八日巳の刻まで留り鈴鹿山崩れて馬荷通
らず廿八日大雨廿九日大風雨辰巳の風つよく八王寺青
梅辺甲州海道往来留り洪水のよし申来候
又同状に六月廿五日大雷よく大風雨あり出し廿八日大
風雨大水両國橋残り永代橋大橋新大はし落る朝日天氣
ニ成り候共上州下總常陸相摸辺通路一向無之候江戸本所
辺昨日の内段々水ひかし床上三四尺四五尺も附申候葛西
領二郷半領上州桐生辺家流れ千住通奥州海道いまだ通

路無之相知不申候（七月五日の註進状）
又近在水損の農民を馬喰町の明地へ小屋をかけしてこれへ
入おきてのち上より施行ありしとぞ（是ハ程へて申し来る）
予も古郷のみ覚束なく。又江戸なくも道中出水の事を聞及
びたれば。さぞ案じ悩るならめと。京へ着とそのまゝ状をもとめ
引つゞけて三度出しけるが。川留なく速はいとゞかず。ようやく
七月十五日に四日出の状とゞきしよし。又江戸より出したる
状を。八月三日の朝大坂へとゞきぬ。その間の心痛なかなか筆に
はつくしがたし。さしぬる旅なりのうれ、そのあるに。獨行と云
ひとつる天変にあひぬれば。只日夜腸を断のみ行んとするに
道なく。かへらんとするにちからなし。家におきなれりのを残
して。長く旅中にありきれば。一日も猶三秋のごとし。晨に夜に忘る

るひまなく。おもふにかはらざる時もなし。行脚頭陀を一身の
うへの風流なり。それも君にはなれて遠行し。或は軍旅に赴
たびなく。遠征せる身にしあらば。思ひ出べきもあらん。
我只風流の為に長旅を歴んとそも誰が為ぞや。世に子と云
ものもたざる人を。これ情をしらぬかなしと。古人世を金馬門に
避く。風流ハ俗塵中にもあるべし。老たる親のかきなれし兒の
かはらん人あつく山川の遊歴をねがふなからんや。すべて遊と
いふものこころにかゝる隈もなきを第一の興とせり。つねにとの
おもふにハ何のたのしみかあらん。子なれ人のいふをきけだ。
遊興歓薬にあるれ日も妻子のことを忘ることゝいふ妻のなきハ
忘まうしも忘もせん。忘まじかれハ子のなきなり。美味をくらふには
子をおもひ美服をきれば子をおもふ。我人愛情のつきなきをし

翁の伯兄名ハ興吉臺右エ門と称し東岡舎羅文と号を
仲兄名ハ興春初右エ門と称し克巳亭雛忠と号を

つまや子をも後にして旅にのみ生きて猶ありふ古さと
旅にて古人のいと悲しきにつまもかきねて
家兄世にいまそかりし日も。常に往来して風流の夜話にふけ
りし。今ぞこゝろの残ることのみくり来てたましひ悟らん。これ
も旅中袖をうるほせし一つなり。おのれ九歳の春父におくれ。
十八歳の夏母なくなりたまひ。十九の秋兄をうしなひ。只家
伯なりける人。近き頃まで何某藩中におもしろければ。ことさら父と
も兄ともかしづきぬ。兄弟そのこのむ所もたがひに(?)。兄も誹諧
をこのみて。才器もはるかにおのれにまされり。おしきかな寛政十
年の八月。四十の秋の月を見終して。黄泉の客となりたまひぬ。
残せるものは妹ひとりのみ。ことさら詞をつくしとすべきの外
もあらず。おのれも元より佛の道をこゝろざしつゝ。紀の國高野

山にのぼりて紀志のねがひありけるに。その洪水にて流されて(?)
くづれ。つひにやぶれたり。萬事の殺風景ことのこゝにあらず

(廿四) 粟津の義仲寺

江州粟津義仲寺のはせを翁塚を。碑の銘なし。義仲の墓ハもと
より後に建たるものとぞ見ゆ。

せいたの蜆(?)をもとめて(?)一

(廿五) 瀬田蜆

瀬田の蜆汁を。醤油のすまし吸物なり。塩梅よろしきものべな
らぞ。

(廿六) 鏡山 附源五郎鮒

近江の鏡山ハ。石部のこなた。平松川辺より右に高く見ゆ。山
色斑々として白銀の如きものあり。雪の消残りたるごとし

鏡山かゝる日影ハ旅くしほふる身なり東路の宿

近江の源五郎鮒を。一説に佐々木家一國の主たりし時錦織源五郎といふ人。漁獵の事を司る。湖水に漁りたる大鮒を。年々京都将軍に獻ぜ。その漁獵の頭人なりけるゆゑ魚の名によびたりとなり。

（卅七）三上山 附 百足山 両談にいでたれバ省く

（卅八）三井の古鐘

三井寺の鐘を古く（？）浮屠の説を信ずるに足らず。辨慶が叡山に引あげたりし時。その鐘のいぼとりたりといふ跡あり。おもふにこの鐘久しく水中に埋もれありしそのゆゑにて自然と生(?)れ損じたるにやあらむ。又大門のうちに辨慶が陣鍋といふものあり。凡湖水の眺望三井の山上よし。さりれども

直輔親王ハ後陽成帝第八ノ皇子幼くして智恩院に入らせたまひ元和元年徳川家康猶子として同き五年剃髪名を良純と改め寛永廿年甲州天目山に配流せられしとぞ ふりゆける の山里ハこゝろせよ竹の園生のすゑなりせば 万治二年洛にかへり還俗して以心庵と号し北野に住りしが寛文九年

志賀越の眼下にみゆるなりけりおもしろきぞ。

（卅九）奴茶屋 両談にのせたれバ省く

（四十）遊女八千代が噂 ○是より京の話を記す

八の宮ハ。遊女八千代にふかく契りたまひ日夜をわかたず放蕩その度にすぎたまへバ。その頃の所司代板倉周防守諫言をたてまつれども。のちひたすらに聞たまはず。板倉止ことを得ず。若干金を以て八千代を身うけしたまひ八の宮に献じ。さてのちしばしありて後八の宮を配流せらる。則八千代もともに配所に至らしむ。ことは八千代が名。よし野より高し。○橋本肥後守經亮話

追考。甲州一國ハ夏ほとゝぎす啼ぞ。その國の人の説に。八の宮甲州にましましたりける折。みやこをこひしがりたまひけれバ都のかたつゆしきなるも（？）ほとゝぎすの（？）一声もありたまひ杜鵑おほかた

八月御年六十六にして薨し給ふ

りふ。家兄羅文の話程へて八の宮歸洛したまひぬ。

壬戌羇旅漫錄巻の上終